

日本プロレタリア文学史論

飛鳥井 雅道 著

近代文学研究双書

八木書店

〈著者略歴〉

飛鳥井 雅道（あすかい・まさみち）

1934年 東京に生まれる

1957年 京都大学文学部卒業

現 在 京都大学人文科学研究所教授

著 書 『日本の近代文学』（1961）

『近代文化と社会主義』（1970）

『幸徳秋水』（1970）

『日本近代の出発』（1973）

『坂本龍馬』（1975）

『近代の潮流』（1977）

『鷗外 その青春』（1978）ほか

現住所 宇治市木幡中御蔵山 5-1-10

日本プロレタリア文学史論 〈近代文学研究双書〉

定価 2,500円

昭和57年11月20日 第1刷発行

著 者 飛鳥井 雅道

発行者 八 木 敏 夫

発行所 株式会社 八 木 書 店

〒101 東京都千代田区神田小川町 3-8

電 話 03-291-2965 / 振替 東京 10457

印刷所 高長印刷 製本所 橋本製本所

©1982 M. ASUKAI

1395-9015-8500

序章 思想・感覚・文体	一
-------------	---

一 一九一一年の問題	一
------------	---

二 『坑夫』のおかれた場所	六
---------------	---

三 『海に生くる人々』と『蟹工船』	一四
-------------------	----

第一章 プロレタリア文学運動の時期区分	三
---------------------	---

一 「時期区分」の必要さ	三
--------------	---

二 「出発点」はどこか	二六
-------------	----

a 『近代思想』の条件	二六
-------------	----

b 『種蒔く人』の場合	二六
-------------	----

三 「第二期」の問題と有効性	二四
----------------	----

a 『文藝戦線』の発刊	二四
-------------	----

b 新作家の登場	二五
----------	----

c 再統一への機運	二五
-----------	----

四 「展開」と「崩壊」の時期	三三
----------------	----

a 「展開」の内容 三

b 「崩壊」と長谷川一郎の意味 セ

第二章 一九二七・八年の情況…………… 五

一 問題の所在…………… 五

二 震災と文化運動の再出発…………… 八

三 福本主義の導入と分裂の時代…………… 七

四 一九二八年の「統一」の内容…………… 二

第三章 作家同盟の転換期・一九三一—三三年…………… 二

一 一九三一年の蔵原惟人…………… 二

二 コップ活動の条件・一九三二年前半…………… 三

三 作家同盟の実態・一九三二年後半…………… 二

四 社会主義リアリズム論争と作家同盟・一九三三年…………… 三

五 むすび——唯研と作家同盟…………… 一

第四章 プロレタリア文化運動末期の「政治と文化」……………一六

一 はじめに……………一六

二 蔵原理論の背景……………一四

a 革命の「切迫」……………一四

b ソビエト文学の動向と文学理論……………一五

三 ソビエトにおける社会主義リアリズム……………一五

第五章 平野謙の登場——一九三〇年代を中心に……………一七

一 批判者の無効性……………一七

二 処女作のころ……………一八

三 「リンチ事件」と『断層』論……………一八

四 高見順論・伊藤整論、そして中野重治……………一九

第六章 民族主義と社会主義——火野葦平の場合……………二〇

一 はじめに……………二〇

ニ 兵隊作家の出身とその作品	一五三
三 おわりに	二〇一
注	二〇五
あとがき	二二九

序 章 思想・感覚・文体

一 一九一一年の問題

いわゆる「昭和文学」の展開の軸のひとつになったプロレタリア文学は、一九二〇年代には、はっきりと姿をあらわしていた。しかし、この日本のプロレタリア文学は、成立から崩壊まで、たえず、その内部の構造において、思想と感覚を一致させることに苦しみ、いくつかの束の間の一致ののちには、ふたたびその分裂に直面せねばならなかった。それに加えて、時代に限定されるジャンルの含む問題を、いま、重要な問題として、まず提出しておきたい。

幸徳秋水の漢詩を、「近代文学」でないと捨てざることは、決してできないはずだと、わたしは考える。「獄中雑詠之一」と題され、一九一一年（明治四四）一月一八日、すなわち秋水処刑の直前に書きつけられた詩は、文学史から排除されてはならないはずである。

區區成敗且休論

区々たる成敗 且らく論ずる休かれ

千古惟應意氣存

千古 惟だ応に意氣を存すべし

如是而生如是死

是くの如くにして生き是くの如くに死す

罪人又覺布衣尊

罪人 又た覺ゆ 布衣の尊きを(一)

多くの文学全集には、明治社会主義文学の代表作として、秋水の作品「東京の木賃宿」を収録するが、これは実際のところルポルタージュですらない聞き書きであり、作家としての秋水の真価は、むしろ『兆民先生』の文体に、さらに意識的に狭く限定すれば、その中に収められた漢詩に、そして終極的には、死刑囚としての右に引いた漢詩にこそ表現されていたのである。彼の詩を、「文筆家」の余技としてのみとらえてきた文学史は、平叙の言文一致文を近代的と考えることに、こたわりすぎていたのではなかったか。

たとえば、逆に考えると、「大逆事件」に触発されて書かれた石川啄木の『呼子と口笛』の連作も、現代詩として奇妙な構造になっていることは、あまり指摘されていない。物語的な作風については語られたが、この詩が一九一一年当時の「われら」「われ」と語りはじめられているにもかかわらず、次の行が平然とでてくるのは、わたしとして若干ひっかかる。

ああ、蠟燭はすでに三度も取りかへられ（はてしなき議論の後）

Nとわれとの間なる蠟燭の火は幾度か揺れたり〔激論〕

「蠟燭」とは啄木がこの連作でくりかえすキイ・ワードなのだが、当時の東京ではすでにまったく使われていなかったはずである。いかにNのモデルとなった経済学者志望の青年がいたことが指摘されようとも、ここでは作品としての内的構造にはあまり関係がない。この詩の世界では、啄木はこの単語によって「五十年前」のナロードニキとの心情的連帯を強めようとしたのだった。しかし、そのことによって、日本の現代詩としてのリアリティをかなりの部分で失ったことは分析されるべきであろう。

啄木は時代を数十年さかのぼらせるかと思うと、当時日本でやっと飛んだばかりだった飛行機を詩にとり入れた。だが、この飛行機のあつかいも、非現実的である。

飛行機の高く飛べるを

との句は、わずか八行の作品「飛行機」中に二度くりかえされるが、この飛行機はあまりにもゆっくりと、あまりにも靜的に、非番の給仕と「肺病やみの母親」の見つめる窓をよこぎってゆくのである。飛行機が作家たちにあたえたショックについては、平野謙にいくつかの論があるが、当時のそれは空へまいあがるのがやっとなであり、新聞報道によれば騒々しさもすさまじかったはずだ。啄木は事実としては飛行機を見られなかった。蠟燭と飛行機は彼の感傷想像のなかに息づくほかなかったのである。詩として価値がおちるといいたいのではない。啄木のもっとも

すぐれた詩にも、やはり短歌でのよわよわしきとつながってゆく部分があることを指摘しなければならぬだけである。それは、中野重治が論じたより以上に、大きかったのではなからうか。啄木において、評論と詩は分裂したままに残され、『呼子と口笛』も強い緊張をつくりつつ例外になりえなかった。一般の評価には反するが、わたしはそう思う。

この時、一見古い形式にそのまま自己を投入した秋水の漢詩こそ、彼の思想と行動と感情を全面的に定着するのに成功した文学的達成だと認めるのも、決してこじつけとはいえないはずである。漱石の漢詩は、吉川幸次郎が説くごとく、「小説を読むためには、必ず顧りみらるべき他の部分である」ことは確実だが、にもかかわらず、漱石自身が認めるとおり、それはいかにすぐれていても余技だった。しかし、秋水が獄中で書いた三つの系列の仕事『基督抹殺論』、『弁護人あての陳弁書』、そして一連の漢詩をみれば、もっとも思想的にも文学的にも内的緊密性をおこしているのは、漢詩である。啄木の一種のよわよわしさにたいして、秋水の詩は硬質な強さと美しさをもつ。

問題はここから出発するのである。

秋水とて、若き日には「いろは庵」の名によって戯作的とはいえ「小説」の道にふみこもうとしたときもあった。被差別部落の問題を小説において摘出しようとした人として、秋水の名はあらためて復権されてよい。しかし、秋水の文体の本領は、言文一致を武器とする近代小説の流れの中にはなかった。日本の現代でいわば必然的に滅びゆく「漢詩」というジャンルに、秋水の文学的努力は集中した。秋水の文体の一部分が『兆民先生』以後、『社会主義神髓』を頂点に、以後、非戦論の孤立、絶望的な恋愛という重圧のなかで強さを失い、感傷的になり、若干冗漫になったことは、彼の著作を読みすすめば明らかな事実だが、獄中の彼が強靱さを回復したのは、にもかかわらず

「志士仁人」への復帰としての結果だったのである。「仁人」の概念は、大正・昭和の社会主義において失われていったものだっただけに、思想的には再検討を要するが、文学としては、「仁人」が「漢詩」によってする表現は、やはり大正へつながってこないのも事実だった。一方で啄木は弱さを、なげきを語ることで、プロレタリア文学の先駆とはなりえても、プロレタリアのための文学^(五)としても自らを提出するのに失敗した。

漢詩と、また一方で、形式的にはまったく新しい啄木の詩は、容易に交わりあうことができなかった。それが、一九一〇年から一年へかけての文体と感覚と思想の分裂として結果した文学状況だったのである。

そして、この直前一九〇五年にアメリカにあった有島武郎は、やはり彼自身の「社会主義」と「文学」の間を結びつけることはできていなかった。武郎は日記に記している。

筆にせしものとは ^(六)Madam Bresicofsky 伝にして、之れを『平民新聞』に送れるあるのみ。

このブレシコフスカヤ伝が、『東京毎日新聞』一九〇五年四月に連載された『露国革命党の老女』であつたことは、瀬沼茂樹によって発掘されている^(六)。しかし、これはロシア第一次革命の開始とともに日本人たちをひきつけ、秋水をふくめて二年間に五種類もの讃辞がささげられたブレシコ伝のひとつとして重要であるとはいえず、文学的には新聞記事以上に出にくいのも事実なのであつた。武郎の開眼は、やはり一九一一年の『白樺』における「或る女のグリンプス」をまたねばならず、この六年間に、彼は「歴史」を「肉体」の問題に、すなわち文学に転換させることによって、かつての「主義」から一度遠ざかることを余儀なくさせられていたのである。日露戦争と同時に『平民新聞』への投稿をはじめた中里介山が、『大菩薩峠』で再出発するまで、やはり一〇年近くを要したことも、有島武郎と同じ事情をふくんでいた。

すなわち、一九一一年の状況は「思想」と「文学」の間に、いいかえれば「漢詩」、「詩」、「小説」のそれぞれのジャンルの間に、たがいに越えがたい深淵をひろげていたのだった。

社会的自覚が、一九〇〇年前後のように、漠然としたものであったときは、広津柳浪の『雨』、『限田の夜道』といった一連の社会小説が、実作として提出されることができたのに反し、「思想」がより明確な形をとるにつれて、かえって実作は生みだされにくくなる事実を、まずはじめに、本書の冒頭で確認しておかねばならないのである。時代をさきまわりしていえば、一九三〇年代にいたるまで、日本の社会主義をめざす文学、プロレタリアの文学、ないしはプロレタリアのための文学の宿命が、ここにもあらわれかけたといっていえなくもない。

一〇年前の寵児・柳浪は、たんに沈黙していたのではなかった。彼は「思想」の攻勢に対抗するために、一九〇〇年なかばには「光明小説」をもって立ちむかい、時代の復讐にあつてはじめて筆を絶つたのである。「思想文学」は秋水の漢詩という近代文学の流れに逆行するところに、明治最後の輝きをひらめかしてほろんだ。一九一一年以後の「冬の時代」は、したがって権力から押しつけられたものだけではないのであり、文学的には、あらためて思想とのかかわりを再検討せねばならない局面がはじまったのであった。

二 『坑夫』のおかれた場所

山はダイナマイトをかけられる毎に、大きな身体をもだえて苦しげに呻いた。が、石井にはその轟然とした凄まじい音響と共に、鉄のような堅岩も微塵に粉碎されるのが、日毎に味う限らない快感であった。彼れは又何

万年とも知れぬ昔から、何物にも触れた事のない山の肉を、自分の持つ鑿の刃先で一鎚毎に擧いで行く快さをも食り味っていた。鑿を持った左の腕を真直ぐに伸して、反身にした身体を半ば開いて、右に持った鉄鎚を遠くから勢こめて打ち下すと鑿の頭からは火花が散って、岩に切り込む刃先からは目に見えぬ何物かが、手から腕へやがて全身に伝わるように覚えるのであった。

宮嶋資夫の『坑夫』（一九一六・大正五年）の冒頭に近いこの一節こそ、労働する肉体の力強い手ごたえをはじめて定着したものであった。最初の一行の擬人法についてはあらためてふれるが、坑夫の石井金次の左の腕にもつ鑿と右手の鉄鎚が打ちあう火花と、「山の肉を擧いで行く快さ」は、秋水も、啄木も発見し表現することができなかった新しいものだったのである。秋水の「仁」や啄木の「思想」が労働する肉体をともなっていなかったことを、宮嶋資夫は、彼らののちわずか五年にして証明しきった。ここに日本プロレタリア文学の最初の実作の達成を見るわたしの意見は、それ自体としては、一九五五年以来小田切秀雄ら『日本プロレタリア文学大系』の編集委員によって提唱された時期区分をなぞっているようだが、力点のかけかたは、すこしことなるのである。

一九一八年ごろから、宮地嘉六らのいわゆる「労働文学」が脚光をあび、宮嶋資夫もこのグループにいられて論じられることが多いのだが、そして資夫と嘉六は、同宿していたこともあるほど親しかったのだから無理からぬ点はあるとしても、やはりこの二人はちがう。労働の捉え方において、二人には区別があるのに注意したい。嘉六の作中の労働者は、いわば本心では働きたくないと思っている。嘉六が『放浪者富蔵』のなかで、主人公に「工場でなしに何処か勤め口はないか」といわせているのがやはり本音であって、のちの回想とはいえ、資夫の『遍歴』にあらわれてくる嘉六のイメージそのままといったところがある。

しかし、『坑夫』の主人公は、親以来の坑夫として設定された。何人よりも「勝れた腕前」をもち、「何処の山でも威張って通れる」人間である。この石井金次は「爆発薬」^{はっぱ}をかけたのち、「今の爆発薬は能く利いたなあ」と誇れるのであり、掘子が「石井さんについてると、はあ、全く楽が出来ねえだ」とぼやくのにたいしては、「おれにつくのがいやならよせ」といいすて得る。

「何処の山へ行っても喧嘩ばかりして直きに人を傷ける——何処にいても、平素飯場にいる時は、無暗に人を怒鳴りつけていても誰も恐ろしがって逆らわない」、……「女癖が悪く」、仲間が夜仕事のとぎその女房を襲って手ごめにする石井は、野田という、足尾すなわち一九〇七年の大暴動の銅山にいた男が仲間を煽動するふりをするとき、つかみかからねばならないのだ。

随分よく喋舌って人を煽てるけれど、てめえじゃまだ何もしたことがねえな。

石井は山仲間と対立し、孤独である。狂暴であり、遂には野田が飯場頭になろうとするのに抵抗し、坑夫たちに虐殺されておわらざるをえないのも、必然的に描きだされねばならないのである。

この作品から、後年のいわゆる「主題の積極性」を見いだそうとするのは無意味だろう。資夫はたしかに主人公を鉱山暴動の生き残りとして描こうとはしていた。「野州の山に大暴動の起った時も、生れつきしななと機敏な身体を持った彼れは、暴動の主唱者よりも勇敢に闘った。手から離れると直ぐ爆発する導火線の短いダイナマイトを投げつけ」……と。

しかし、その次の文章である。

家を焼き人を傷つけて、血と火の漲る叫喚の裡に、全身に充ち渡った反抗の念を熔け込ませたが、……軍隊の

力に圧迫されて重だつた者の多くが捉えられたときも、素敏い彼れは、山伝いに巧みに逃げ終せた。

作者は足尾にいた口達者な理屈屋野田にたいして、アナーキーな反逆者にはつきりと身をよせているのだが、このとき、作者が坑夫体験者だつたからという文学史的常識は、この際完全に訂正しておかねばならぬだろう。資夫の『遍歴』を虚心に読めば、「親戚の者が日本では初めてだつたタングステンの鉱山をやりはじめたので」そこへ勤めたのであつて、「山の現場で宿直当番」を「喜んで引き受けた」し、「その金でもつて、坑夫等と大いに飲んだ」けれども、「鑿」を握っていたわけではなかつたことである。作者の分身は『坑夫』の中では、吉田という「洋服を着て」見張小屋にいる、石井への同情者たる「事務員」に造形されているのである。今までの作品の読みは見当ちがいなところではめていたことになる。

体験が単純に小説になつたのではなかつた。資夫は没落した家から三越の小僧にだされているあいだも、幸田露伴を訪れて文学修行を語り、泉鏡花を愛読していたのである。そして、ゴリキの何を読んだかを明らかにしていないものの、彼は折にふれてゴリキについて語っている。露伴とゴリキのくみあわせは、ある意味ではそれほど唐突なものではなかつた。露伴が描いた「職人」の世界、芸や技術に集中する男たちの世界と、ゴリキの世界がつくりだす生身の人間のはだの感覚は、職を転々とする資夫のなかでひとつの生活のスタイルとして、一見すれば前近代的であるかも知れぬ絶望的な鉱山労働者への共感を育てていた。

丁稚、小僧、坑夫の「見張」、古本屋、土方といった生活の変転のなかで、もともと力強いのが、坑夫の石井金次のイメージとして形象化されたのである。「思想」の影はたしかに「野州の山」におちているが、「足尾」の経験者・野田は軽蔑の対象である。それは、資夫がもはや一九〇七年の足尾に感動した秋水や、日本社会党第二回大会

(一九〇七年)の後継としてではなく、坑山そのものの生活を優先させた文学的結果だったともいえる。

文学作品にとって、思想や概念が先行してはならないこと、また生活そのものがそのまま優位にたてないこと、作家が実生活との距離をはっきり意識した上で形象化に努めたとき、はじめて作品が成功することを、『坑夫』一篇は示していた。

秋水の思想的あとつぎとしての大杉栄が『近代思想』の各号において、志士仁人とは本質的にちがう思考のあたらしい様式を發揮したことは、明治から大正への転機をあらわすものだったのはいうまでもないだろう。『近代思想』創刊号の「本能と創造」(一九二二年一〇月)に「本能の偉大なる創造力」を説き、本能を強調する大杉栄は続ける。

本能は盲目だ。従つて本能其儘の表現は多くの誤謬を伴ふに違ひない。けれども失敗は猶無為に優る。……やがて本能の行為其物にアイデアが出来て来る。人の行為を律する在来の多くのアイデアは、在来のミリュウの間に出来た旧人のアイデアである。新人は此等の在来のアイデアを棄て、更に新人自身の新しきアイデアを創り出さねばならぬ。

大杉栄は、この文章で「所謂悪徳文学」をも肯定する口ぶりをもらすのだが、この『近代思想』を露店でみた自称「土方」資夫が栄のもとを訪ねるのは、こうした論文にひかれたからにちがいない。『近代思想』のグループそれ自身は、宮嶋資夫よりも實際は古風な「主義者」たちだった。荒畑寒村は『冬』、『夏』等の短篇を発表しつつも、「大逆事件」の残党の個人的体験に固執する以外に、文学的展開を充分には見いだせず、社会主義運動へ復帰するしかなかったのである。もとより寒村は、のち「寒村自伝」に生き生きと描きだされたように、横浜の遊廓に育ち、彼自身、横須賀海軍工廠で通称「カンカン虫」労働者として、資夫よりはるかに本格的な労働体験を経た人だ